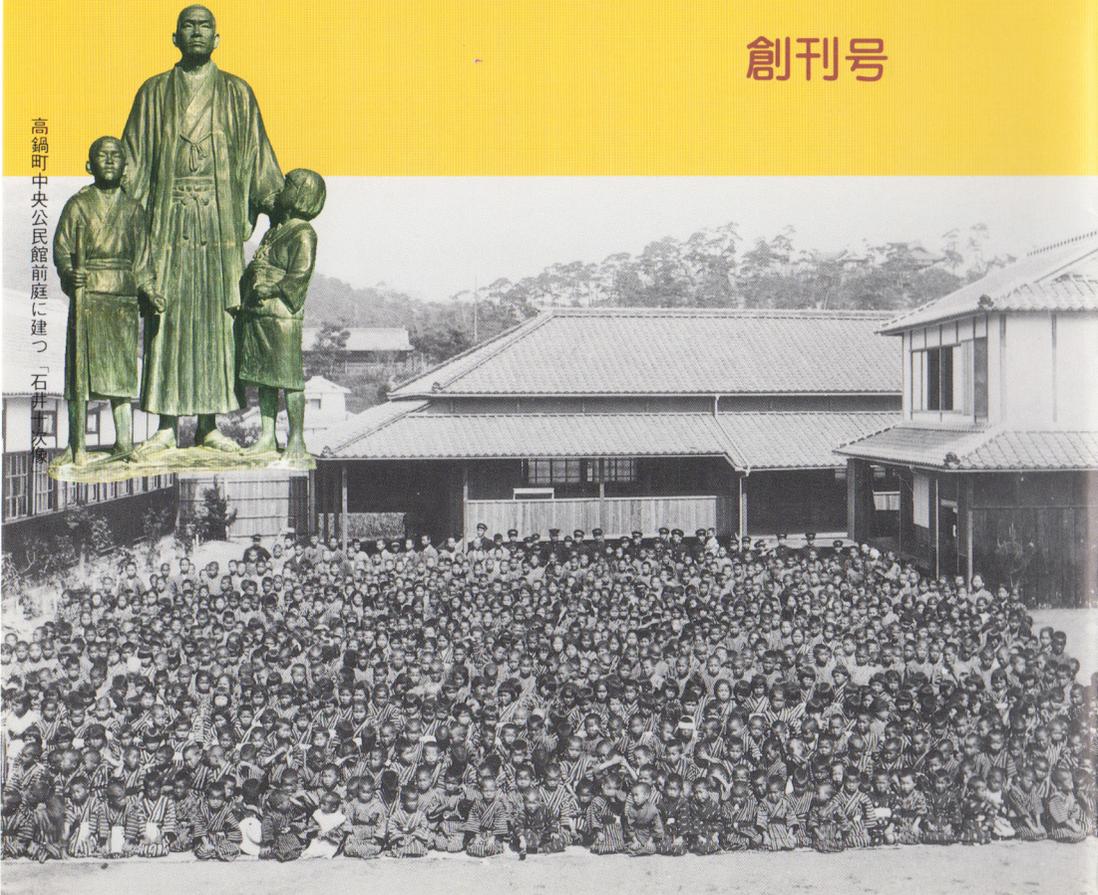


石井十次顕彰会だより

創刊号

高鍋町中央公民館前庭に建つ「石井十次」



財団法人 石井十次顕彰会

石井十次顕彰会よりの援助金贈呈
西都市内 西都市福祉作業所



土持所長へ援助金を贈呈する
顕彰会（松田副理事）

田淵所長へ援助金を贈呈する
顕彰会（松田副理事）



石井十次顕彰会よりの援助金贈呈
新富町内 ルピナス作業所

石井十次顕彰会の事業の一つとして、近隣の施設を選定し、写真のように本年度は二施設に援助金を差し上げました。

石井十次顕彰会けんじゅうかいは次の事業を行います。

- 一、石井十次賞
石井十次先生の精神にふさわしい業績のある個人・団体を表彰し、社会福祉に対する意欲の高揚を図る。
- 二、広報・啓蒙活動
・石井十次先生に係わる生誕記念式典・講演会の開催。
・石井十次小伝の作成配布（小学五年生へ）
・石井十次肖像写真の配布
・県文化公園に建立される石井十次像建設への参加
- 三、福祉施設に対する援助
・社会福祉施設を訪問し、慰問と必要物資の贈呈。

あとがき

「石井十次顕彰会だより」の第一号を運ればせながらお届けいたします。極めて多い足跡のうちから創刊号にふさわしい内容記事を選択するのに編集担当者の会合等を重ねながら作成してみました。
第二号は、読者の皆さん方のご意見を主な内容として、編集してみますのでよろしくご協力下さいませようお願いします。
編集子一同

財団法人 石井十次顕彰会
理事長 尾崎 一 男
事務局 高鍋町教育委員会内
TEL 〇九八三（二三）〇〇四八

発行：石井十次顕彰会
題字：宮崎県知事 松形祐典
印刷：南印刷センタークロダ
発行日 平成4年2月1日





創刊に際して

理事長
尾崎 一男

「石井十次顕彰会だより」の創刊にあたりご挨拶申し上げます。

石井先生は近代日本の夜明けを告げる、明治維新の前夜、慶應元年四月、高鍋に生まれました。

幼少の頃から『思いやり』の深い人で、『慈愛献身』孤児のためなら、金も、命も、名誉も、いらぬとの信条で、その一生を費やされました。

福祉という言葉さえ定着していなかった、明治二十年、二十二歳の若さで孤児救済に着手し、東北地方が冷害のため大飢饉に襲われた明治三十八年にはあらゆる困難と闘いながら、一千二百人余の孤児の面倒をみたほど、その生きざまは、自己犠牲、自己没却の生涯でありました。

いま我が国は世界に類例をみない経済発展を遂げ、飽衣飽食の時代を迎えるに至りましたが、この豊かな生活を求める経済の成長は、これからも限りなく続くことでありましょう。

より豊かで、より便利な生活ができることは、喜ぶべきことでありますが、一方、このことは、競争の激化を招き、他者より自己という、自己中心の構図になっていくのであります。

この経済優先のスタンスの代償が、『お金は得たが、心は貧しくなった』という精神的貧困の時代になったのであります。このように、『心貧しく、愛なき時代』『汚物の中の日本』と今酷評されている。

石井先生の『人類愛の心』を顕彰し、広めて行くうとしている私どものこのささやかな運動が、多くの人々の共感を呼び、人類の指針となり、灯火となり、心豊かな日本になることを祈りながら創刊のご挨拶を申し上げます。



現存する茶臼原孤児院跡の「鐘楼」



町民代表による献花（石井十次生誕祭にて）



パネルディスカッション（石井十次のつどい）



創刊に寄せて

宮崎県知事
松形 祐堯

「石井十次顕彰会だより」の創刊を心からお喜び申し上げます。

当誌の創刊に当たりまして、尾崎理事長さんをはじめ、関係者の皆様のご苦勞、ご尽力にたいし、深く敬意を表する次第でございます。

ご案内のとおり、石井先生は高鍋町に生まれ、その生涯を孤児救済に捧げられ、我が国の社会福祉事業の先駆者として大きな功績を残されました。

石井先生の崇高な人類愛と社会奉仕の精神は、物の豊かさの中で、心の豊かさを見失ってしまいがちな今日、私達に問いかける大きなテーマであると思っております。

こうした中で、石井先生を顕彰し、社会福祉活動に対する意識の高揚を図るため、当誌が創刊されますことは、誠に時宜を得た意義深いことであります。皆様の活動を契機として、宮崎県内はもとより全国的に社会福祉の輪が広がることを大いに期待するものでございます。

終わりに、石井十次顕彰会のみならず、ご発展と皆様のご健勝を祈念しまして、創刊に寄せる言葉といたします。





祝 辞

厚生省保険局長
黒木武弘

「石井十次顕彰会だより」の創刊を祝します。
石井十次は、社会福祉事業の先駆者として、「厚生省五十年史」の中でも、「石井十次による岡山孤児院は、規模、内容で最もまとまった施設で、孤児の処遇においても…」と、高い評価で記されています。

しかし、石井十次のことは、残念ながら厚生省内でも知っている者はごく僅かです。

私は、初仕事が児童福祉であったし、子供の頃によく母から聞かされていたので、ある程度のことには知っているつもりでしたが、このたび石井十次顕彰会の資料で石井十次の人となりや生き方を知ることになったという思いです。

この石井十次顕彰会だよりが、多くの人々に「石井十次」を知る機会を与え、「大きな愛」の輪を広げ、我が国の目指す心豊かな福祉社会へと限りなく結実して欲しいものです。

尾崎理事長をはじめ石井十次顕彰会の皆様の尚一層のご尽力に期待します。



お祝いのことば

高鍋町長
白 杵 直 孝

石井十次顕彰会だよりの発刊を心からお祝い申し上げます。

物の豊かさから、心の豊かさが問われる時代になりましたが、その中で一番必要なものは「人間愛の心」、「思いやりの心」ではないでしょうか、高鍋町が生んだ近代社会福祉事業の先駆者、石井十次先生は正にこの心の具現者であったと思います、先生の顕彰を行うことを通して、いま一番求められている「人間愛の心」、「思いやりの心」を拡げることが福祉への大きな一歩となることを念じて、ふるさと創生事業として取り上げたところであり、多くの方々のご賛同をいただきました、そして、さらにその輪が広がっております。

その力が結集され發揮されたとき、高鍋町は真に福祉の町となることと思います。そうなることを念じてお祝いの言葉といたします。



石井記念友愛社
入り口の標識

顕彰意見発表

平成三年四月十一日の石井十次生誕記念式典に於いて、高鍋町内の小学校、中学校、高等学校の児童生徒の代表の皆さんが、「石井十次先生の顕彰意見発表」をされたものです。

高鍋町内に小学校・中学校・高等学校各二校があり隔年毎に交代でおこなわれております。



高鍋町立高鍋西小学校
五年
西 利 佳

■石井先生から学んだこと

わたしは、はじめて石井十次先生を知ったのは、小学校一年生になってからです。その時は、あまりくわしくはわかりませんでした。毎年西小学校で行われる「石井十次先生をしのぶ会」で劇を見たり、道徳の時間に十次先生について学んだりしているう

ちに、大変えらい人だなあと思うようになりました。特に、石井十次先生の生き方で心を打たれたところは、岡山孤児院で一千二百人の孤児たちを救って育てたことです。そのころの岡山孤児院は、食糧もお金も少なく、先生や孤児たちは大変苦しい生活をしなければなりません。今とは比べようもないくらい貧しい生活だったようです。

しかし、十次先生はこの苦しさにくじけず、一千二百人の孤児たちのために募金活動をしたり、またある時は、神様に深くおいのりをしたりしました。十次先生のうわさを聞いて、善意ある人々から心あたたまる寄附金が送られてきたそうです。

このように多くの寄附金が集まり、孤児たちが飢えることなく生活できたのも、十次先生の熱心な活動のおかげだと思えました。

また先生は、寄附金ばかりにたよってはいけなさいと思ひ、孤児たちに勉強すること、働くことを覚えさせました。わたしは、このようなことも、大変えらいことだなあと思いました。

わたしは、この石井十次先生のような人を見て、むかしの生活はすこびしかつたんだなあと思っています。わたしも困っている人をみかけたら、十次先生のような心で助けてあげようと思います。そして、わたしたちの高鍋町から、このようなすばらしい人がでたということ、これからもずっとほこりにしていきたいと思えます。





高鍋西中学校生徒会 代表

二年 田中 美知子

■石井十次先生から学ぶこと

私達、高鍋西中学校の生徒は、石井十次先生の生誕地で毎日学習し、生活していることをとても誇りに思っています。

石井十次先生や孤児達の自給自足の生活は、最初から苦勞の連続で、何か月もの間作物が収穫できず、飲まず食わずの毎日で想像を絶するものだったと聞いています。しかし、それでも途中で投げ出さず、みんなの力を合わせて額に汗して頑張り、最後はたくさん収穫により多くの人命を救ったと知りました。その背景には、茶臼原孤児院へ寄附されたお金を、石井先生はその場しのぎの食糧や生活に浪費するのではなく、先々を考えて儉約を繰り返して、農具や肥料、種子代にあてていたという事実があったことを聞きました。それからしても、まさしく石井先生は「孤児の父」と謳われるにふさわしい人物だと思います。

ところで、石井先生が大正二年（一九一三年）三月十一日に発表された茶臼原憲法の中に、「天は父なり、人は同胞なればお互いに信じ、相愛すべき事」とあります。



私はこの言葉が心に強く残りました。意味については自分なりに考えてみました。『天は父なり』は、神が父のような大きな存在であり、父は神と同じように私達を見守ってあげるといふことだと思えます。『同胞』は、辞書に同一の国民であり、さらに英語で brother（兄弟）と書いてありました。

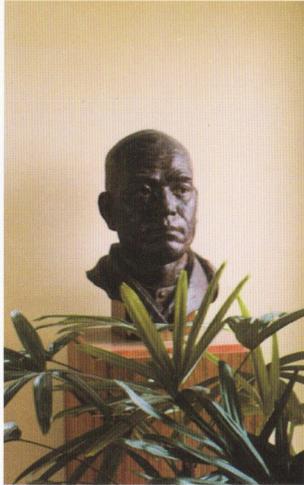
これは、人類みんなが兄弟のように仲良くすることを言っているのだと思えます。『相愛すべき事』とは、お互いに人を信じ、愛し合いなさい。ということだと思えます。これからの教えは、我々の学校の集団生活においても大切なことのように思え、みんなが同じ気持ちになってくれれば、いろんな活動の成功も納められるだろうし、学力の向上にもつながっていくものと思えます。

本心に、石井十次先生からは、いろんな事を教えられました。私達も先生のような優しさ、そして力強さをもった人間になるように努力し、二十一世紀を担う高鍋町民になることを誓いたいと思います。どうぞ、石井十次先生、私達の成長を温かく見守りください。

各地に建てられている 石井十次像



岡山市内門田町近くの博愛会病院玄関横



岡山市新天地育児院内の礼拝堂



岡山市の石井聖園（喩伽山上）



西都市茶臼原石井十次墓地



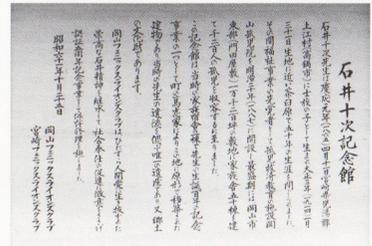
此の寺の一室を間借りして孤児と暮らし始めた



最初の孤児と出会った岡山市上阿知の大師堂



「十次館」と説明板（岡山市内新天地育児院内）





宮崎県立高鍋高等学校

普通科二年

後藤 英一

■石井十次について

石井十次は、「孤児の父」としての偉業が称えられています。しかしその一生は厳しいものであったと思います。なぜ十次は孤児教育に生涯をかけたのでしょうか。今日はこのことについて考えてみたいと思います。

十次は二十四歳の時、重大な選択をせまられています。医学の道と孤児救済のどちらを歩むかということです。この二つの事を両立させていくのは不可能でしたし、彼はクリスチャンでもあったので聖書の影響もつけています。

聖書には、「人は二主に仕えることは出来ない。」とあるのです。この時彼は、すでに多くの者が志す医学よりも、志す者の少ない孤児救済の道を選びました。彼は自分が今、何をなさねばならないかということをはっきり自覚したのでした。

その後貧しく苦しい生活が長く続のですが、そんな中でも、彼は災害などで苦しむ多くの孤児を救うために、日本中を駆けまわっています。このようなことから、彼は弱い者、困っている者をほおってはおけない思いやりの心と、自ら心に決めたことは

一貫してとことんやりぬく強い意志をもっていたことがわかります。

しかし、この「思いやりの心」と「強い意志」は、最近の私達には欠けつつあるのではないのでしょうか。石井十次の故郷であるこの高鍋では、そのような事があったはなりません。私達は石井十次を誇りとし、また鏡として生きていかねばならないと思います。

「茶臼原憲法」というのがあります。彼が茶臼原で孤児教育を始めたときにできた憲法です。これに石井十次の精神が現れていると思います。

人間は全て同胞で、お互いに信じ合い助け合うこと。

人間は皆、大自然の恩恵のもとにいつも仕事に精出すこと。

人間は皆、天に感謝し節制を保ち、人のために提供すること。

私の学んでいる学校の正門脇に石井十次の詠んだ詩碑があります。これを朗読して終わりにします。



県立高鍋高等学校
前庭に建つ詩碑

孤児の父 「石井十次」

アラカルト

Q どんなことをされた方ですか。

A 色々な事情で親を亡くした孤児を数多く養育するため、岡山市門田町に日本最初の孤児院を開設し、それぞれ職を身につけさせ自立への手助けをされた方です。

Q 孤児たちは、どんな職を身につけたのですか。

A 印刷・クリーニング・精米・理髪・帽子製造・機械工・マッチ製造、等いろんな手仕事をとおして働く喜びを感じさせ、社会へ送り出したのです。

Q 多くの孤児たちの生活費はどうしていたのですか。

A 孤児院を開設するまでは自分で働いて生活費を稼いでいたが、多数になるとそんなことでとうてい追いつかなくなり、社会の人々からの義援金で院の生活費をまかなくなっていました。しかし、その義援金がいつでも集まるということでは無かったので、とても苦労されたようですがいろんな記録でわかります。

※ 以下 次号へ

ああ 美なるかな 日向の地

予は実に爾を愛す

ああ 壮なるかな太平洋

予は実に爾を愛す

・・・人間はその境遇によって教育

せられるものとせば

爾、高鍋よ

爾は予が理想的人物を養成

するに於いて

もつとも適当などこなり

ああ 美なるかな尾鈴山

ああ 壮なるかな太平洋

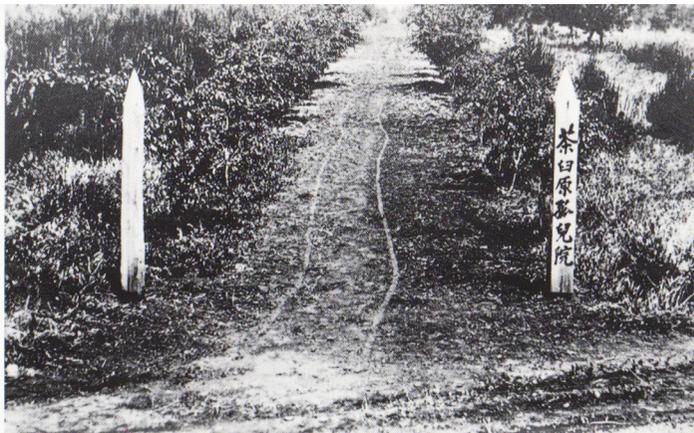
発表の原文は「英文」ですが、訳文で収録させていただきました。



(明治二十六年まで)

| 年号 | 事 | 年齢 |
|-------|----------------------------|------|
| 慶應 元年 | 宮崎県児湯郡高鍋町大字上江馬場原の自宅に生まれる。 | 一歳 |
| 明治 四年 | 高鍋島田学校(元、明倫堂)に入学 | 七歳 |
| 十一年 | 高鍋学校卒業 晩塾学舎に入学 | 十四歳 |
| 十二年 | 東京芝政玉社に入学 | 十五歳 |
| 十三年 | 脚気のため東京より帰郷 | 十六歳 |
| 十四年 | 上江小学校の教師となる | 十七歳 |
| 十五年 | 岡山県甲種医学校へ入学 | 十八歳 |
| 十七年 | 馬場原朝晩学校開校式挙行 (現 馬場原公民館) | 二十歳 |
| 十九年 | 岡山県甲種医学校卒 | 二十二歳 |
| 二十年 | 前原定一を大師堂に救う | 二十三歳 |
| 〃 | 定一の外二名の孤児を伴って岡山に帰る | |
| 〃 | 孤児教育会(後、岡山孤児院と改称)を岡山三友寺に設く | |
| 二十一年 | 岡山市京橋下の浮浪児二十余名を軒下学校で指導す | 二十四歳 |
| 二十二年 | 米国少年会より寄附金三十一円到着す | 二十五歳 |
| 二十三年 | 長女友子生まれる | 二十六歳 |
| 〃 | この頃より色々な事業部を設く | |
| 二十四年 | 濃尾震災の孤児救済数九十三名となる | 二十七歳 |
| 二十五年 | 名古屋に震災孤児院を設く | 二十八歳 |
| 〃 | 次女震子生まれる | |
| 二十六年 | 岡山大洪水 年長院児等防水に尽力す | 二十九歳 |

(以下は次号へ)



開墾間も無い頃の茶臼原(桑畑)



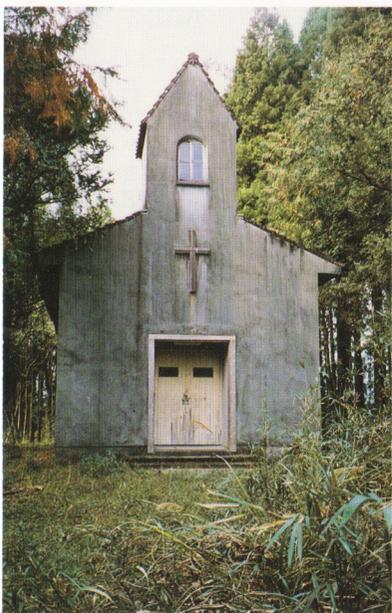
歳月を経て現在見事な茶畑となる



平坦地の水田(現在)



石井十次資料館入口の石柱



茶臼原に今も残る「礼拝堂」



西小学校庭のレリーフ



西小学校玄関に建つ「信愛和」碑

石井十次生家の庭に建つ徳富蘇峰直筆の碑



石井十次が提唱して始めた 朝晩学校跡
(現 馬場原公民館)

